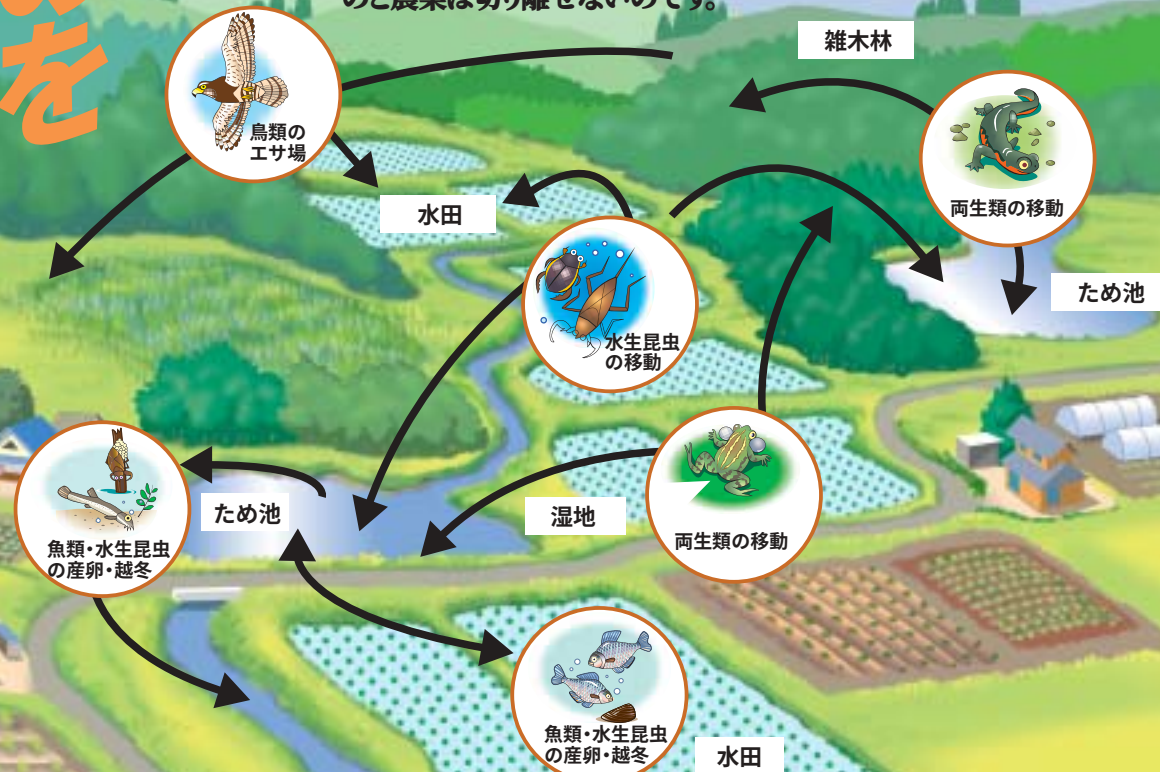


生きものを 育む農村

農村は生きものの宝庫

日本の農村は、食べものをつくる現場でありながら、多様な生態系を抱える豊かな世界です。水田やため池、水路などには小さな生きものたちがいます。メダカ、ドジョウ、タナゴ、ゲンゴロウ、ミズカマキリ、タイコウチ、イモリ、カエル、タニシ、ホタル、トンボ……。それを狙うサギやサシバなどの渡り鳥。田んぼ周辺の雑木林には、クワガタムシやカブトムシなどもあります。日本の農村はまるで、いのちのゆりかご。田んぼだけでなく、民家の生け垣や屋敷林、土手や田んぼのあぜまで環境ネットワークが広がっています。

これらはすべて農業が営まれているから、維持されていること。身近な生きものと農業は切り離せないのです。



はじまっています！ 田園自然再生への道

2002年3月にまとめられた「新・生物多様性国家戦略」で、生物の多様性を保全するため、里地里山など二次的自然の環境保全の重要性が唱えられました。それ以降、全国各地で田園自然再生への動きが活発化しています。

また、環境との調和に配慮した事業を実施するために、市

町村自らが地域の「田園環境整備マスタープラン」を作成しています。これは、将来を見据えた地域全体の環境のあり方を基本方針で明確にし、「環境創造区域」や「環境配慮区域」を設定するもので、より自然と共生した農村環境づくりが進んでいます。

引っ越し大作戦

ほ場整備などを行う際、工事のために住処を追われる生きものを住民の手によって安全な場所に移動させる「作戦」が全国で広がっています。その名も「生きもの引っ越し作戦」。大分県竹田市平田地区では2002～2004年に3回行われ、子どもたちも参加して、山際の池などに移しました。イモリやトノサマガエル、ドジョウ、ドンコ、コオイムシ、タイコウチなどを捕獲して引っ越しさせ、植物ではタコノアシやジャヤナギなどが無事保護されました。引っ越し後も生きものたちの多くは元気に生息しているそうです。



水田魚道を設置！

宮城県伊豆沼2工区は、自然環境との共生を目指した地域づくりを行っている稲作地帯です。ここでは、2003年から地域農家を中心となって「小規模水田魚道」の設置が行われています。水田魚道とは、生きものが水路と水田を行き来するために用意された水路です。木製で、農家が自らの手で作製・設置を行いました。この試みを通して、地域の小学校や住民たちが連携して生きもの調査を行ったところ、ドジョウやナマズの遡上が確認されました。

全国的にこうした取り組みは進んでおり、水田周辺の生態系や地域の自然環境に対する意識が高まっています。



田園自然再生活動コンクール

農林水産大臣賞
豊岡市祥雲寺区、
コウノトリ市民研究所
(兵庫県豊岡市)

行政と市民団体、農業者団体等が連携して2005年のコウノトリの野生復帰を目指し、水田ビオトープ、水田魚道整備、環境保全型農業の試行などを実施しています。



農村振興局長賞
西鬼怒の川に親む会
(栃木県河内町)

生態系に配慮したほ場整備事業の先進地。農業者・市民・行政・企業・学生が一体となり生態系保全水路の整備・管理を行い、人と自然が共生する農村環境を復元しています。



自然環境局長賞
耳納塾・おたから堀の会
(福岡県田主丸町)

絶滅危惧種のヒナモロコの生息地を中心に、石積み・土床の多自然型水路「おたから堀」をつくったり、ヒナモロコの里親制度を設けるなど農村環境の保全活動を行っています。



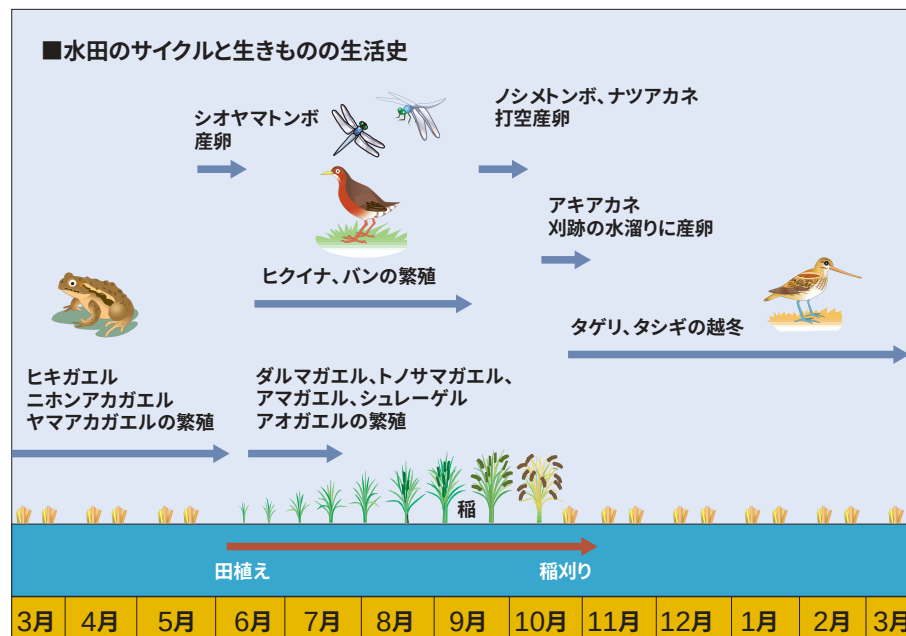
朝日新聞社賞
環境稲作研究会
(福岡県前原市等)

生物除草による減農薬栽培など、自然環境の維持と再生を図る農法を実施している会。地域農業への普及活動、地域の子どもたちへの環境教育、体験学習などを行っています。



田んぼと生きる 生きものたち

田んぼとその周りを生息地とする生きものは、稲作と深いかわりをもっています。田植え前、田に水が入ることで、そこは水生昆虫やカエルなど両生類の生活の場になります。また、稲刈り後は、田んぼの水たまりに赤とんぼ(アキアカネ)が卵を産み落とします。田んぼに水を張るのをやめてしまったら、そこにあった豊かな生きもの世界も同時になくなってしまうのです。



資料:農村環境整備の科学(社)農村環境整備センター編